Ⅲ．埋蔵文化財講演会の記録

古墳時代の変革と地域社会

岩崎卓也

１．はじめに

ただいまご紹介に預りました岩崎です。お話は得意でないもので、ご辞退しようとしたのですけれども、いろいろないきさつからのっぴきならないことになりまして、ここに立たせて頂くことになりました。

私、この豊田という街は初めてでございます。すごい自動車の街だろうと考えながら来ましたが、意外にも閑静な住宅地が広がっておりましてびっくりいたしました。この豊田で思い出すことは、宇津木古墳からすごい鏡が出土している、という話を聞いたことです。それからもうひとつは保見の伊保遺跡から変な土器がたくさん出ているという話で、これまた大変びっくりしました。この土器を見学に、と思ったこともあったのですけど、ついに二十数年、見ることがないまま、今日に至ってしまいました。そんなことで少し伊保遺跡のあたりからお話しさせていただきたいと思います。

２．土器の分布が意味すること

土器については、その分布ですとか、いろいろな形で問題になります。図１をご覧頂きたいと思います。これらはみな、友人たちが作ったよく見る図ですね。こちらの赤塚次郎さんの図も参照させて頂いております。ここでまず注目したいのは、同じタイプの土器が広がりをもつことの意味です。ある器種の組み合せが、例えば壺だとか甕だとかいろんな種類の容器の組み合せが生活を反映するとは、よく言われることです。そしてまた、同じようなデザインが分布するということは、同じ文化圏を示すなど、いろいろな解釈が行われています。しかし、なかなか簡単にはいかない問題です。

関東の弥生時代中期といわれる、紀元前後ころの土器を見ますと、各地域で使われた土器の組み合わせが一緒です。蓄えるための壺、それから煮炊きのための甕、そして盛りつけるための（椀）皿の類いですね。生活様式を反映する組み合わせは揃っておりますけれども、よく見ると文様や形とかは、地域によるちがいが非常にはっきりしています。こういうときに私どもは、稲作によって人びとが定着の度を増し、しかも自給自足的な暮らしをする単位が各地に生まれ、他所との交流がほとんどなくなった結果、それぞれの地域ごとに、土器もちがう顔をもつようになったと説明するのが一般的だと思います。関東の場合は、時と共にその地域圏が狭まっている、つまりより自給圏が狭まり、小地域化がどんどん進んだようです（図１—①）。

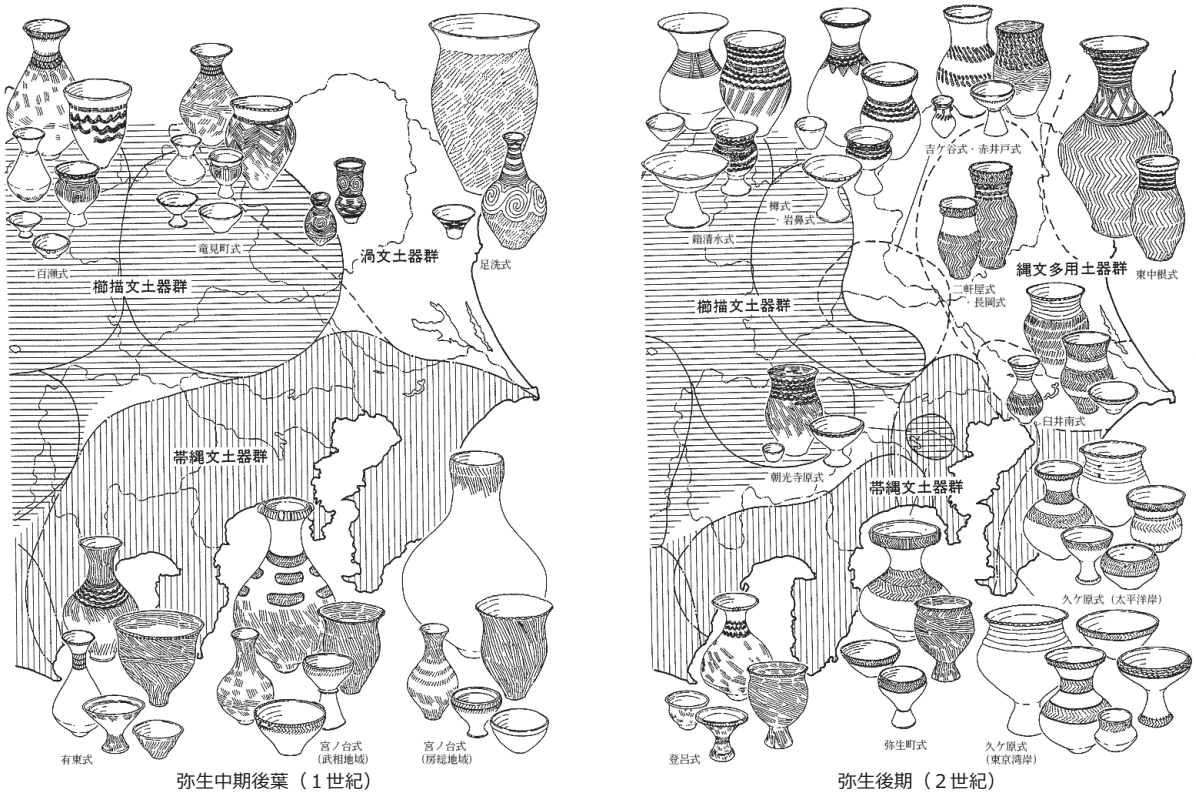


図１–①　弥生中期後葉と弥生後期の土器分布図（設楽博巳原図）

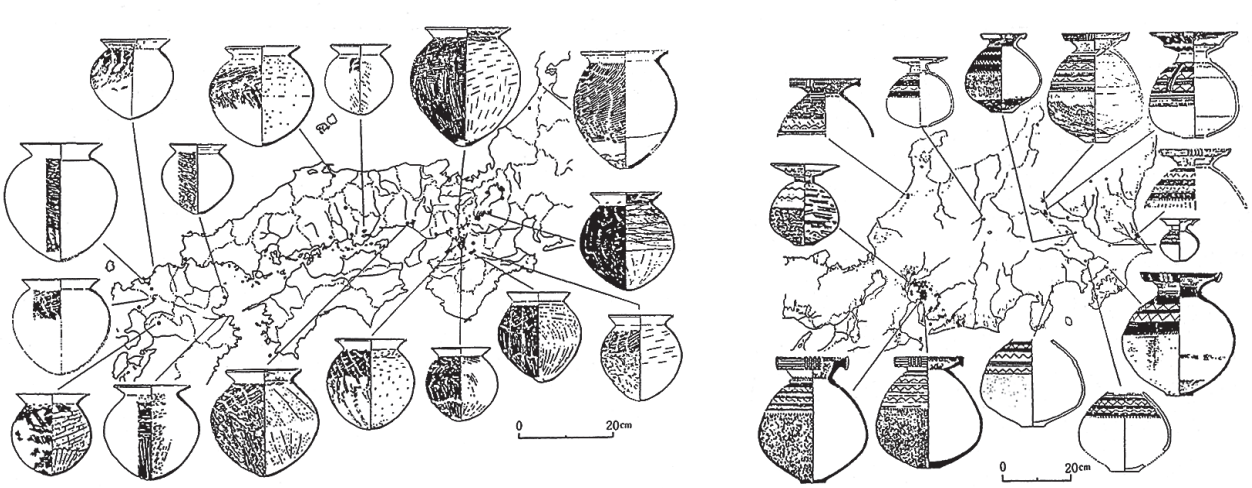


図１－②　西日本における庄内甕の分布（左）と東海西部系装飾壺の分布（右）

つぎに図１—②をご覧下さい。３世紀のころ、それまでの地域間の相違をのりこえて、列島の各地で、同じ手法の土器が使われ始めたのです。図の左は、近畿地方に始まる、いわゆる庄内甕、図の右は、伊勢湾岸で生まれたパレス・スタイルと呼ばれる壺の広がりです。明らかにそれまでの地域圏をのりこえて、ある場所で生まれた土器が広がるというところに次の問題があります。この事象について、力による侵略を考える人もいるだろうし、別の理由を主張する人も居ます。図から、庄内甕は西日本へ、パレス土器は東日本へと広がったかに見えます。しかし、図１—③は、これは赤塚さんのお作りになった図面ですけれども、これはＳ字口縁という薄作りの台付甕が西日本にも拡散していったことを示すものです。西の方へ行った庄内甕もまた、関東などへもたくさんきているのです。

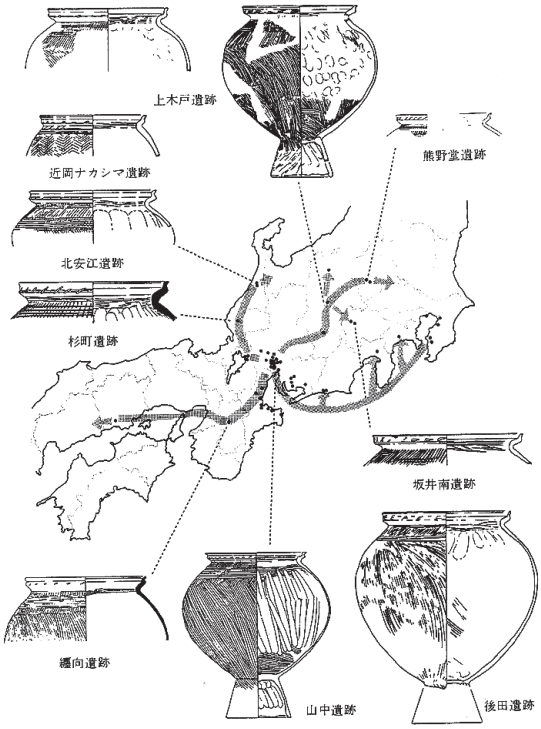
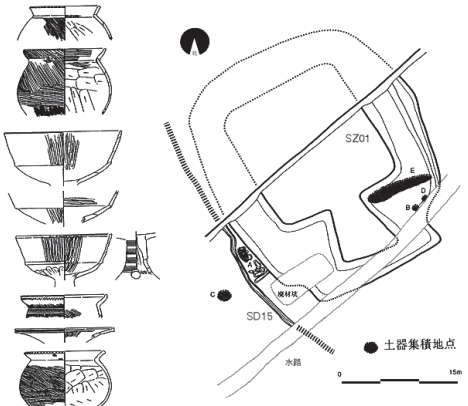


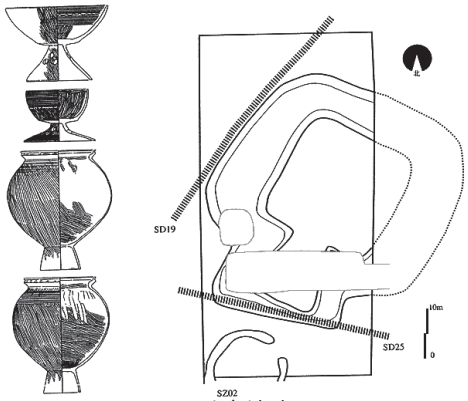
図１－③　Ｓ字甕の移動（赤塚次郎原図）

土器以外の要素、としては前方後方形のお墓、あるいは前方後方墳と言う人もおります、これがパレス土器の分布圏に展開します。そして図２—①の、あの有名な廻間遺跡、あるいは図２—②の西上免遺跡が、非常に早い段階に、赤塚さんの言われる廻間のⅡ段階というころに出現したと言われています。大変古い前方後方形のものです。そしてこれがやはりある分布圏をもつというのです。分布圏をもつのなら、それについて、やはり何らかの解釈が必要です。これをある種の力をもった首長が誕生し、パレス土器の分布域のあちこちで前方後方形のお墓をつくったのではないか。これはパレス土器を共有する首長の連合によるものなのだろうか、それとも突出した大首長による政治圏の成立を意味するものだろうかなど、いろいろな解釈が当然出てくると思います。前方後方形の大型墓が、広がりをもつということに、ひとつのある種の政治的、文化的な交流圏を想定する人たちは多いのですけれど、実はそれにもなかなか簡単にはいかない難しいことがあります。

例えば、千葉県木更津市の高部という前方後方形のお墓ですね。出土した土器を調査者である小沢氏が公表されております（図３—①）。これを見たとき、すぐに先ほどの展示場に並んだ土器のあるものに類似することに気が付かれるだろうと思います。つまり、ここからは東海地方の土器がたくさん出土しているのです。しかも、東海地方で生まれたとされる前方後方形のお墓なので

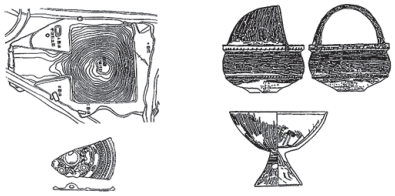


①廻間遺跡

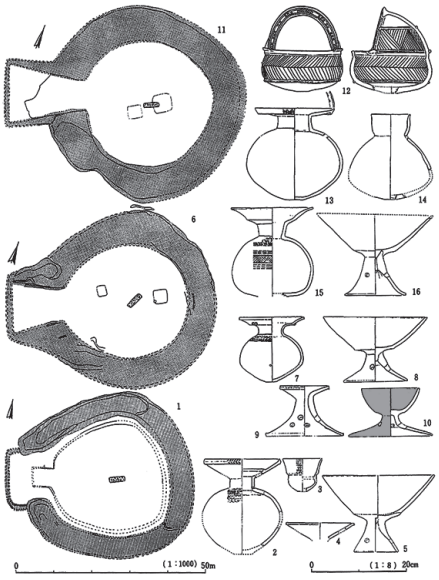


②西上免遺跡

図２　愛知県廻間遺跡と西上免遺跡（赤塚次郎原図）

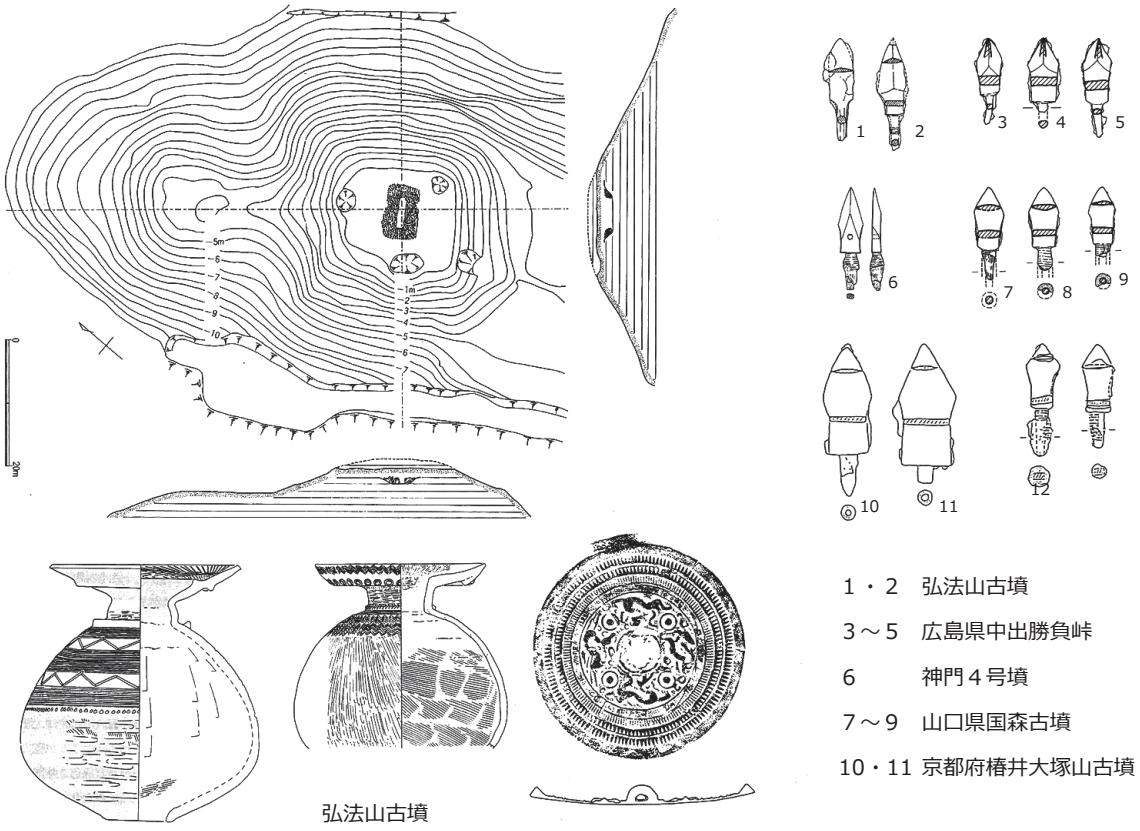


①高部 32 号墓（小沢　洋原図）



②神門３～５号墓（田中新史原図）

図３　千葉県高部 32 号墓と神門３～５号墓



弘法山古墳

1・2　弘法山古墳
3～5　広島県中出勝負峠
6　　神門４号墳
7～9　山口県国森古墳
10・11　京都府椿井大塚山古墳

図４　長野県弘法山古墳と各地の墳墓・古墳出土の鉄鏃

す。千葉県も同じ政治圏か、というふうに考えたくなります。

ところが同じ千葉県、東京湾東岸の市原市という、あまり木更津市から遠くないところに、「神門３～５号墳」として調査された墓が、田中新史さんたちによって紹介されています（図３—②）。これを見ると、やはり土器には東海地方系のものもあります。しかしいっぽうで近畿地方的な色彩をもったものもあるのです。しかもこれは同じ千葉県の東京湾東海岸にありながら、片方は前方後円形である。単純に分布圏を設定するわけにはいかないようです。

さらに神門５号墳の場合には、身に穴が連続してあいている鉄鏃が出ています。西上免にもやはり穴のあいた銅鏃が出土しています。たくさんの穴をあけるという共通性は一体これは何だろう。かなり共通した要素として理解していいのではないだろうか。そうすると前方後方墳の世界と前方後円形のものをつくった人たちとは決して対立するようなものではなく、何らかの形で接点があったことにもなるのかもしれません。

それから、有名な佐賀県の吉野ヶ里遺跡にもやはり前方後方形のものが見つかっております。前方後方形のお墓の、地域ごとの傾向を示された図面がございます。見比べていきますと、この吉野ヶ里の前方後方形のものは、ここで赤塚さんが「東海型」といったものと重なる、と考える人が多いと思います。「東海型」のものが、佐賀県の有明海の近くにある、となると、これは、伊勢湾地方とどうかかわっていたのだろうか、と気になったりもします。いっぽうで吉野ヶ里遺跡では、これとはちょっと地点を異にしますけれども、Ｖ区といわれているところの溝のなかから、近畿地方的な土器が出土しています。庄内式と言われる近畿地方のものと共通するものだと思います。いっぽうこの遺跡のすぐ近くに、諸富町という町がありますけれども、そこの土器のなかに東海地方の土器の文様を付けたものがたくさん見つかりました。つまり有明海のあたりまで東海系の土器が広がりをもっているのです。そういうふうにあちこち、ある場合には面で広がり、ある場合には点や線で連なっている。それは広がり方によって解釈がちがってくるのかもしれませんけれど、これをどう考えるか、というのはやはりひとつの問題点だろうと思います。

引き続き、この御当地の豊田市伊保遺跡から出土した土器を見て頂きますと、これが近畿地方のいわゆる庄内式土器などに通じる技術をもった土器であるということは文句がないだろうと思います。つまり三河の地にも、東海系土器の組み合せをもった地域のなかではあるけれども、集中的に他の地域のものが入ってくることもないことはないようです。こういうものについてやはりどう理解していくのか、ということが問題になるだろうと思います。

土器の分布から見てこういうことが言える、それから前方後方形の墓の広がりについても同様なことが考えられそうです。そしてさらによく言われるところですけれども、「三遠式銅鐸」と言われる三河地方、遠江地方を中心に広がりをもっていた銅鐸の分布域とこの東海地方の土器の分布域は重なり合うらしいということです。この三つのそれぞれの要素をどういうふうに解釈するか、もはや土器だけの問題として、あるいはお墓だけの問題としては解決できない問題だろうと思います。

たとえば松本の弘法山古墳、これは後出する立派な古墳ですけれども、ここからは図４にありますように、鉄の鏃が出ております。それから鏡が出土しております。それから壺が出ております。他のものも出ておりますけれども、それだけ取り上げてみますと、壺は明らかに東海地方で成立したものでして、表面を赤く塗ってあって、着色していない文様帯にはジグザグ模様が入っている。まさにこちらの特徴をよく示しているものが出土しております。東海地方と非常にかかわりが深いことは分かりますけれども、それと同時に、ここで注目したいのは鏡です。これは「上方作竟」銘がある青銅の中国鏡でございます。おそらく三角縁神獣鏡などが作られたころに、それに先んじて入ってきた鏡だろうと考えます。そういう鏡を中国から入手する立場にあったのでしょう。さらに注目したいのは、鉄鏃であります（図４右）。そして今度は図３—②にいきます。隣の先程見ました神門４号墓から出土したという土器を見ますと、やはり東海地方的なものもございますし、近畿地方的なものもある、ということになりますけれども、それと同時に、非常に特徴的な五角形をした鏃が出ております。

そしてこの場合には鏡が出土しておりませんけれども、その隣の、同じころにつくられた、高部 32 号だとか、30 号墳などでは、やはり中国製の三角縁神獣鏡が入る以前だと思われるような鏡が出土しております。

この二つを基準に使っていきますと、たとえば広島県の中出勝負峠という古墳がございますけれども、このお墓を見ましても、やはり形は変わってきているけど、五角形の鉄の鏃と、これまた小型で古い中国製の鏡が出土しています。

そして西の方ですね、福岡県の生掛というお墓がありますけれども、これは円形に巡らした堀の一部が掘り残されている、やはり前方後円形に近い形ですね。神門４号と比べていただくと分かりますけれども、共に近畿地方的な壺が出土しています。そして、中国製の鏡が出土している。それと同時に五角形をした鉄の鏃も出ている。共通して言えそうなことは、中国製の鏡、それは三角縁神獣鏡といったものじゃないんですけども、がそれぞれ一、二面ずつ出土している。そしてしかも、弥生時代の伝統にはなかった定角式と呼ばれる五角形の鉄鏃が出土する、という共通点があります。

中国製の鏡を副葬するということは、外からのものを受け入れられる立場にあったということでしょう。そして五角形の鉄鏃をたどりますと、これまた韓国の大成洞29号墳のような海の向こうの墓から、同じようなものが出ていることが知られます。これなどはおそらく時期的には遅れる京都府の椿井大塚山古墳から出土したものと、かなり似通った形態をしています。

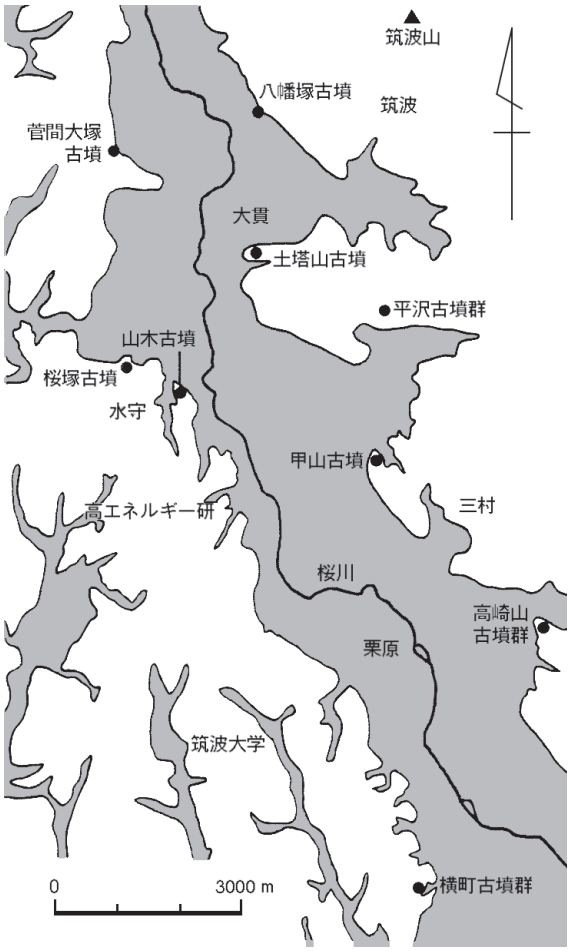


図５　旧筑波国の古墳分布

３．古墳に葬られた人びと

さて、このように大きなお墓、分布をのりこえて広がりをもつものを見ていきますと、この古墳出現期の前方後方形、前方後円形というお墓の主は、中国の鏡などを入手することができる、共通する条件があったと考えてみたくなります。はたしてこれは個人と個人の連帯によるものなのか、それともある種の首長の下における階層的な社会の形成を反映するのか、いろいろな問題が付随してきます。

こういうお墓に入った人びとは一体どんな立場の人たちだったのか、少し考えておこうとしたものが図５になります。これも私、あちこちで言い尽くしていることですから、もうまたか、ということになってしまうと思うんですけれども、５世紀にどういう変化があったかを見るために、４世紀の古墳の特色を、もう少し整理しておこうというのがこの関東の話の筋書きです。『常陸国風土記』によりますと、かつて茨城県には、「常陸」以前にもっと小さな国がたくさんあった、ということが書かれてあります。そしてそのなかのひとつに「筑波国」があげられておりますし、また「茨城国」などもあげられております。そしてその筑波国というのは、現在の筑波郡と言われるところとほぼ同じ広がりをもっていたと思います。

ここで見ますと、いくつかの前方後円墳が筑波の桜川の水系に、そしてその川筋に広がった低地帯を挟むように点在しております。よく見るとそれぞれ築かれた時期は異なるようです。なかで、一番古い古墳は前方後方形をした、水守の桜塚古墳です。やや遅れまして、今度は前方後円形の山木古墳がつくられました。桜塚古墳が４世紀の半ばくらいにできて、山木古墳が４世紀の終りくらいにできた、というふうに考えていいでしょう。その次になりますと今度は５世紀の前半期ころの古墳が川筋を隔てた対岸につくられます。それが土塔山古墳。そしてこれに続く前方後円墳は同じ川筋につくられた５世紀中葉ごろの八幡塚古墳、そして５世紀末ないし６世紀初

めの甲山古墳。つまりここにあるいくつかの前方後円墳、あるいは前方後方墳と呼ぶ、首長墓といわれる形のお墓は、一世代一古墳という形でつくられたと理解してよいということになりそうです。筑波国の頂点に立った歴代王者のお墓ということになります。そうすると、その頂点に立った人のお墓がなんで川を渡って、右に築かれたり左に築かれたりしたのだろうか、ということが問題になります。

そこで私どもは、平安時代の全国のムラの名前がでている『和名類聚抄』を見ていきました。筑波郡にあったというムラの名前を調べますと、まず目に付くのは「水守郷」というムラ、それから「大貫郷」というムラなどがあります。大貫郷に関連しそうな地名は、土塔山古墳のあたりに今、大貫という字名があります。

そうすると、初代、２代はもとの水守ムラの地の古墳に葬られた。３代目のお墓はもとの大貫ムラというところにある。それから４代目のお墓はというと、これは八幡塚古墳になりますけれども、筑波山麓の「筑波郷」の地、今の地名で言えば大字筑波にあたります。そして５代目のお墓を探していくと、６世紀前半の甲山古墳が見つかります。ただし甲山古墳の付近には郷名と一致する字名がございません。ところが、たまたま古墳のすぐ裏にあるお寺が注目されました。極楽寺というお寺ですけれども、そのお寺の山号が、三村山だったのです。多分このあたりが、『和名抄』の三村郷に対応するところだろうと考えました。少なくとも、いくつもの平安時代のムラの広がりにまたがって、川の東、西に関係なく次々に古墳がつくられた。そう理解すれば、古墳が築かれた時代にもいくつものムラがあって、そこに葬られた人びとは、初代、２代まではのちの水守ムラの地に、３代は大貫ムラに、４代は筑波ムラの地にかかわりがあったとするならば、この地域の歴代王者は、決してひとつのムラの出自ではない。首長の地位はあちこちのムラの頭みたいな人に次々にまわされていった可能性がある、と考えたいのです。

筑波国の隣にあった茨城国は、筑波よりも少し広がりが大きく、恋瀬川・園部川という２つの川筋があります。最初の古墳は、２つの川筋の上流に、それぞれ前方後方墳として出現いたしました。東日本の一般的なあり方です。そしてここでも続く古墳は前方後円形になります。次に川筋ごとの古墳の動きを見ていきますと、やはり川筋の上流付近の人たちが代表していた園部川流域の古墳は、恋瀬川筋に全長 182 メートルという巨大な舟塚山古墳が築かれる４世紀末ころには、見るかげもなくなります。５世紀も後半期に入ると、形勢は逆転します。園部川流域の古墳がきわだつようになるのです。つまり首長権は決して一地域、一集団のうちにとどまるのではな

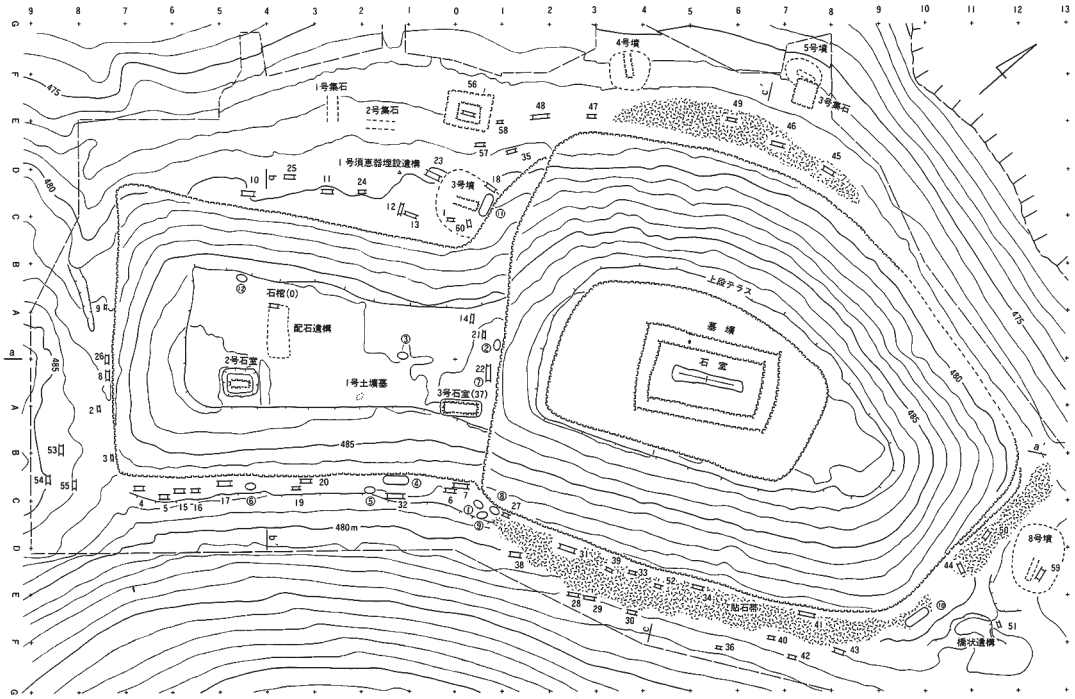


図６　長野県森将軍塚古墳

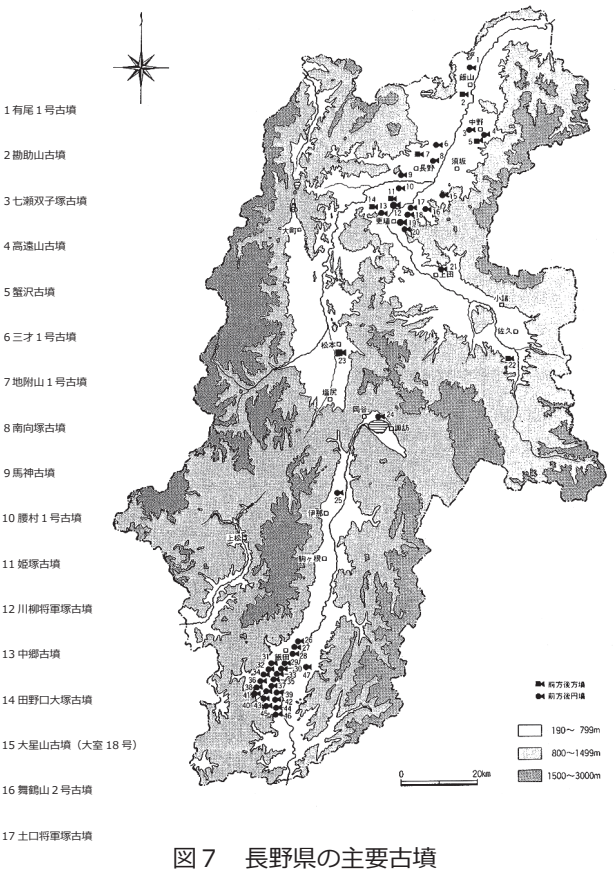


図７　長野県の主要古墳

く、いくつかの集団間をも複雑に移動するような世の中だった、と考えることはできないでしょうか。

このようなシステムが認められる世の中とは一体何だろうというのが、次の問題点となります。長野県の善光寺平でも前方後円形の首長墓は、筑波と同じように、千曲川の右に築かれたり左岸に行ったり、広い地域のなかを一ヶ所に集中することなく、転々と移動していく点で共通しています。つまり分散型の古墳分布は茨城県だけの問題ではない、ということになります。

さて、首長権が動くというとき、それらと民衆とのかかわりは一体どうだったのかを見るには、森将軍塚古墳がひとつ参考になります。図６のとおり、この古墳はいびつな前方後円形をしています。この古墳がつくられたのは４世紀の半ば以前だと思います。この古墳の裾にはたくさんの埋葬施設があります。明らかに、この古墳の裾線を念頭において、設けられたものです。

一番解釈しやすいのは、それはトップが死んで、前方後円墳に葬られたとき、かれに仕えていた隷属民が周りに殉葬させられたということです。この古墳の主が、強力ないわゆる専制的な王者だったとすれば、そう言えると思います。ところがその周りの連綿と並ぶ埋葬施設に埋葬されている人びとはいずれも、短期のうちにまとめて埋葬されたものではなく、この古墳ができてから百年くらいの間に、次々につくられたお墓の集積だということが分かりました。しかも、埋葬された人びとのなかには、首飾りをしているものもあったり、鎌をもっている人とか、それなりの副葬品が入っております。そうなると、とても隷属民の墓とは考えられないのではないでしょうか。

そうすると、首長の死を心から悲しんだ多くの人びとが、自分が死んだら、この大好きな首長の近くに墓をつくって欲しい、つくるのだ、と心に決めた身内の人々の墓、という理解もできそうです。つまり、首長と民衆とは、決して階級的な対立関係にあったのではなく、自分も身近にあったあの首長の近くへ葬られたい、という願望を抱く、つまり民衆と苦楽を共にする首長といった、共同体的な関係があったのではないか、と理解することも可能ではないでしょうか。

とすると、ある地域圏のなかでムラからムラへと首長権が移動していってもそれぞれの地域の民衆は、たとえムラがちがってもその首長は、やはり自分らの代表との思いをこめて従った、と考えられるかもしれません。

ところが５世紀になりますと、図７の「長野県の主要古墳」を見て頂きますと、初期の古墳は善光寺平南部に集中しております。それが５世紀半ばころを境に、今度は南の伊那谷に前方後円墳が集中するようになります。しかも、その古墳は天竜川に流れこむ何本もの小河川ごとに築かれ、決して散在形態はとりません。川筋ごとに初代、２代、３代とたどれる古墳が、狭い範囲に集中してつくられる、という点で、前の時代とはちがってくるのです。４世紀から５世紀に変わるころ、信濃では、北の方にあった古墳群が衰え、代って南の方に中心が移ることが指摘できるのです。

つぎに図８「武蔵・相模の主要古墳分布図」をご覧下さい。武蔵・相模、つまり東京の周辺地域では、古墳が万遍なくあるわけではありません。しかも古い４世紀半ばころの古墳を見ますと、だいたい多摩川水系に築かれております。

ところが、５世紀代には、ここの大型墳は姿を消し、代って利根川に近いところに集中的に築かれ始めます。「埼玉地方」と書いてあるところに稲荷山古墳という、鉄剣を出土した有名な 100 メートル規模の古墳がまず

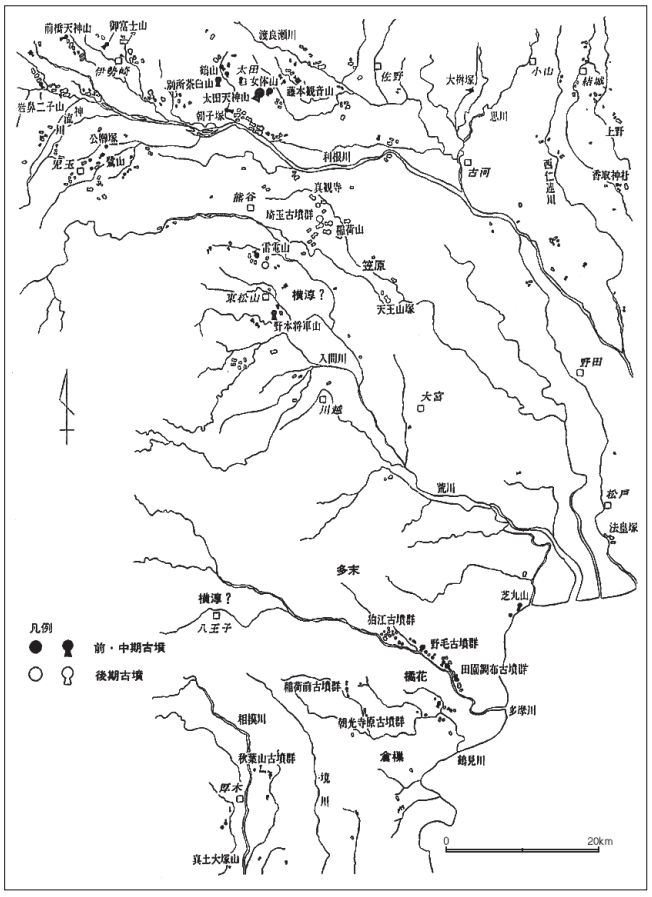


図８　武蔵・相模の主要古墳分布図

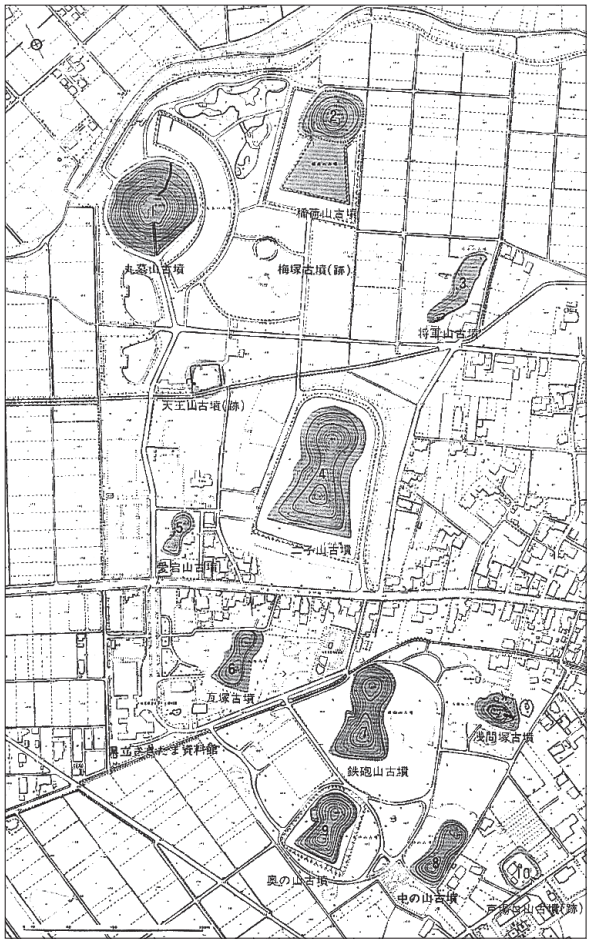


図９　埼玉県埼玉古墳群

築かれます。そしてこの地に、次から次に古墳がつくられるのです。本来は南武蔵に中心があった古墳が、この５世紀の半ばを境にしまして、南武蔵の方から北武蔵に中心が移ってしまったと考えてもいいと思います。

「埼玉県埼玉古墳群」の図（図９）をご覧頂くと、一番北に稲荷山古墳がございます。前方部が削り取られております。そして、その横に日本で一番大きな円墳、直径 105 メートルある丸墓山古墳、中央部あたりに二子山古墳があります。今、埼玉古墳群整備のための発掘調査が進んでおりますが、この埼玉稲荷山古墳は四角い堀を巡らしていたようです。さらにその外にもうひとつ堀が巡らされていることも確認されております。二重の堀を巡らすと、その外堀はほとんど丸墓山の堀に接してしまいます。それから二子山古墳の堀も二重に巡っています。将軍山古墳という半分壊れてしまった古墳があります。この古墳を巡る堀も二重であることが分かりました。すべての古墳の外堀は、相互に接し合っていたのです。

二重の堀が相接するこれらの古墳は、一番古い５世紀末の稲荷山古墳、６世紀の半ばの丸墓山古墳、その次に二子山古墳というかたちで、一世代一古墳の割合で系列化していることが分かります。それが一ケ所に集中して、堀がほとんど接し合うようにして、次から次へと墓がつくられているとなれば、ある血筋の人たちが首長権を独占してしまった姿、まさに氏的なものが誕生して、同族墓を形づくったと考えられないでしょうか。

有名な『日本書紀』の安閑天皇条に、武蔵国造の話が出てきます。それによりますと、安閑天皇の元年（534）に、小杵と笠原使主が、武蔵国造の地位を争った。小杵というのは大変やることのいやらしい人だったので、お隣りの上毛野国君小熊に助けを求めて、笠原使主を殺そうとした。それを知った笠原使主は、都へそのことを訴えます。都では、これはけしからん、ということになって、小杵を殺させました。そして、笠原使主を国造の地位につけた、というのです。国造の地位を得た笠原使主は感謝のしるしとして四つの屯倉を献上したということが続けて書かれております。

四つの屯倉というのは、多氷の屯倉、それから橘花屯倉、倉樔屯倉、横淳屯倉ということです。これらは地名からみて少なくとも三つは多摩川水系にあったと考えられています。つまり、４世紀のころ、武蔵を支配した人びと、つまり小杵たちの拠点は多摩川水系だったと言え



講演する若崎卓也氏

そうです。したがって、この古墳の分布は武蔵の政治的変動に関係するんだと言われたのが新潟大学にいらっしゃった甘粕健先生です。確かに話としては大変面白い。

しかし同じようなケースが日本のあちこちで、同じころに起こっています。しかも埼玉古墳群の場合には、最初に稲荷山古墳が５世紀後葉に出現しました。安閑期はご存知のとおり、６世紀の前半期になります。そうすると時代的に合わないからこの話は埼玉古墳群とは関係ない、と言われたのが金井塚良一先生です。そのあたりのことは争いがありますけれども、どうも５世紀、とりわけ半ばぐらいに、それまで古墳をつくっていた地域で築造がばったり止まって、別なところにつくられるようになる所が多く、決して埼玉だけの問題ではない点は注意しなければなりません。

それと同時に、長野県のように谷筋の狭いところに相次いで前方後円墳がつくられ、特定家系の歴代墓を思わせるようになります。

だいたいにおいて、単系の父系社会とか、或いは母系社会とか、出自がはっきりしているところは、婚姻形態が外婚形態をとり、一方の血筋を軸に、集団として結束を固めます。そういうところでは、無前提で他集団の長をいただくことはありません。

ところがいっぽう、もちろん近親婚はある、族外婚にこだわらない社会はどうなるでしょう。それは、父方も母方も区別されず、同じ親戚だと同格に扱われることになります。そういう族外婚にこだわらない社会だと、親戚は限りなく広がっていってしまいます。あの家も、あそこのムラも親戚、そっちのムラも親戚、ということになってしまうと、そのような集団の誰が頭にでても基本的に変わらないことになります。もし父方母方にこだわらない社会だったとするならば、ある地域のなかで、誰が頭になってもあまり問題がないという集団関係が想定されないでしょうか。

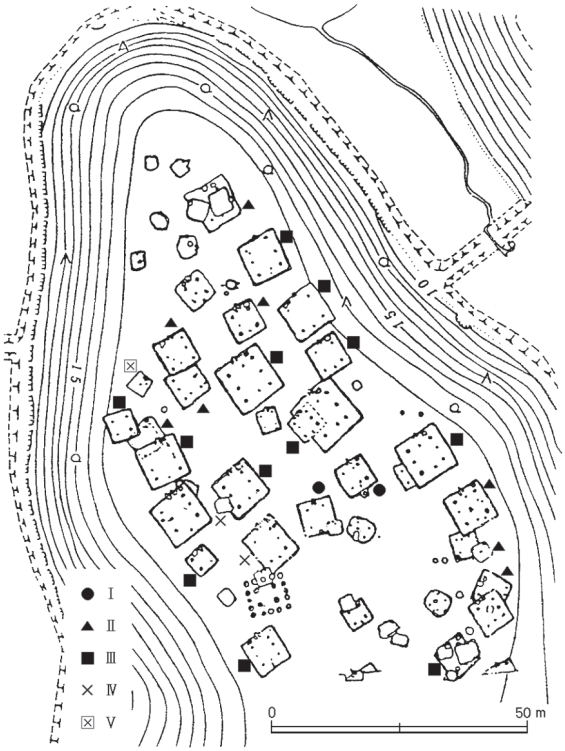
それが５世紀の半ばくらいになって、特定集団が特定墓所を占有する集団に様変わりしたとなると、単系の同族団の形成が急速に展開したということでしょうか。そうなりますと、当然のことですけれども、曖昧な社会に対して、単系的社会ではもちろん苗字ができるわけですね。氏を形づくる雰囲気が出てきます。同族団組織を志向するようになってきますと、お墓は当然、同族団ごとにまとまっていくと考えられないだろうか、その点をもう少し補足説明してみたいと思います。

４．古墳時代のムラと民衆

図 10 は、この時期の集落のひとつの傾向を示しています。東日本、特に関東地方の集落調査の結果は、いろいろな人がいろいろな立場から論じておりまして、私らの立ち入る余地もないのですが、図 10—①の千葉県大井東山遺跡の図をご覧下さい。これは６世紀から７世紀に入るころを中心とする時期のムラということで出しております。それから図 10—②､茨城県の陣屋敷遺跡です。

さて、この千葉県大井東山遺跡の第Ⅰ期というのは、ちょっと下の方に二つの竪穴が並んでいます。最初の住民たちは二軒の家に分かれて住んでいたのでしょう。それから程なく、第Ⅱ期を迎えます。他所からまた人が入ってきます。そして第Ⅰ期にここに竪穴を掘った人たちの住まいは、第Ⅱ期には続きませんから、あるいは他の地点に移ったのかもしれません。第Ⅱ期になって人がちょっと増えてきます。第Ⅲ期になりますと、かなりの数です。ところが第Ⅳ期になりますと、このムラはすっかり衰えて、ほとんど人がいなくなってしまったようです。そして第Ⅴ期になりますと、たった一軒がのこります。そして第Ⅴ期をもってこのムラは終ります。非常に短い時間に、あるところにムラができて、そしてそれが広がっていったと思ったらすぐ小さくなって、なくなってしまった、ということです。

陣屋敷遺跡の方をご覧頂きます。「陣屋敷古墳時代Ⅰ期」と書いてあります。調査した方がたの話によりますと、Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期を古墳時代前期、だいたい４世紀を中心にした時代を考えているということです。１を見ますと、西側の台地の上に家が建ちます。ところが、４世紀も半ばぐらいになってくると、２を見て頂きますと、



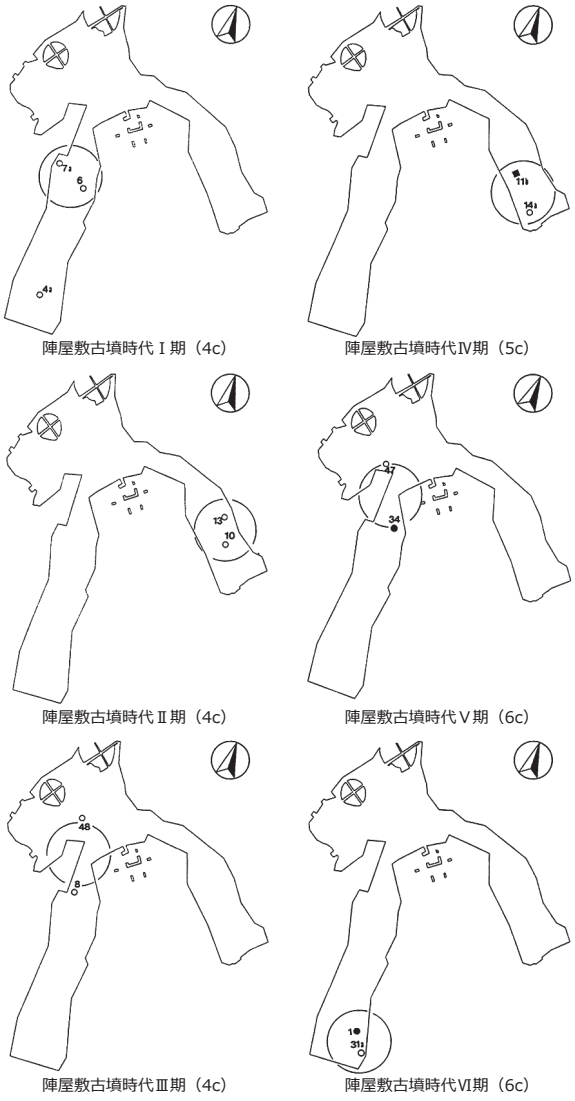


図 10 −①（上） 千葉県大井東山遺跡
図 10 −②（右） 茨城県陣屋敷遺跡

今度は東側台地の先端近くに家が二軒ございます。その次の第Ⅲ期になりますと、今度は西の台地の付け根の方に二軒の家が建ちます。そして５世紀に入りますと、また東の外れの方に家が建ちます。そして６世紀には西の方というふうで、ひとつのムラのなかに建てられた家は転々と位置を変えています。つまりこの場合に考えられるのは、このムラのなかに固定した宅地が、これが私の土地です、と私的に占取されていたわけではなということです。

それで思い出すのは、アイヌ民族は土地をもたないという言葉が江戸時代の探検家によって説かれていることです。それを見たとき思いおこすのは、北海道の擦文文化といわれる、本州では歴史時代に入ったころの遺跡のあり方です。この時期のムラ跡には、竪穴住居が万遍なく掘りこまれていますが、決して重なったりすることはありません。古くなった竪穴は放棄され、新しい竪穴は、別な場所に掘りこまれていきます。こうして、放棄された竪穴がどんどん数を増やしていくのです。

また、遊牧民社会、例えば現在の西アジアのベドウィン族は、折りをみて定住生活に入ろうとします。定住生活に入った農村に行ってみますと、あちこちに建っている土の家には垣根などはありません。だから、家を出て、まっすぐ歩いていけば隣の家の敷地にいつの間にか入っていきます。そしてこっちの方へ行くと、また隣の家とつながっている。つまりムラのなかの路は家と家を結ぶものであって、それ以外のものではないようにみえます。そういうところでは、例えば若い人が結婚すると、かれらはムラのなかの空き地を物色し、そこに家を建ててしまいます。それもそのはずです。その土地は私有地ではなく、ムラびとなら誰が使ってもいいムラの土地だから

です。

そういう目をもう一回日本に向けますと、それぞれの地域でムラが、生まれたり、大きくなったり小さくなったり、なくなったりするのは、いくつものムラの間を、人びとが規制なしに移転して歩けた、ということなのでしょうか。

この傾向は関東地方の場合には、奈良・平安時代になっても変わらないようです。この時代の人たちも、ムラのなかばかりか、ムラからムラへさえ適当に動いたのではないかと思えるのです。

そこで、図 11—①、群馬県の黒井峯遺跡をご覧下さい。調査した石井克巳さんの説明によりますと、単位をなす建物群は竪穴住居 1 基と、平地式の建物がいくつか、そして菜園状の畑で構成されている。それを囲むように、柴垣が巡らされていました。生け垣と書いてありますが、これは柴垣です。ムラの単位となった小集団は、自分たちの生活領域をちゃんと柴垣で区画していた、という説明をされます。確かに他の地点でも、同様な施設群を柴垣で囲ってある。しかしよく見ると、柴垣の形が非常に不整形なのです。ある場合には三角形に、ある場合には楕円形だったり、自分たちが今使うのはこの範囲だという、縄張り意識の表現であって、宅地として世襲されるものという確固たるものではなかった、とすれば理解できるのでしょうが、すでに宅地として固定していたと考えるには、疑問をもっているのです。

ただ 5 世紀の半ばと言いますと、別な動きも出てきます。それが図 11—②の大阪府大園遺跡の例です。これは明らかに溝をもって区画をしている、方形の区画ですね、その区画がいくつも連続していたのです。今の言葉で言うならば、明らかにこれは宅地造成と言っていいものでしょう。当然のことですけれども、この区画のなかというのは、居住する人びとの権限が認められた範囲と考えられるのではないでしょうか。こういう私的占取の傾向が出始めているらしい、とだけ言っておきます。宅地の共有から、私的占取への変り目といえるでしょう。

図 12 は、古代の歴代大王とその宮殿の名です。崇神天皇の場合は、磯城瑞垣宮、景行天皇の宮は纒向日代宮、最後の方になりますと、飛鳥地方に集中する傾向がありますが、代が替わる度に宮殿の場所が変わっています。歴代遷都と言います。各地域で首長の地位に就いた

図 12　大王（天皇）と宮都

崇神	磯城瑞垣宮	垂仁	纒向珠城宮
景行	纒向日代宮	政務	＊近淡海志賀高穴津宮
中哀	穴門豊浦宮	応神	難波大隅宮
仁徳	難波高津宮	履中	磐余稚桜宮
反正	丹比柴籬宮	允恭	＊遠飛鳥宮
安康	石上穴穂宮	雄略	＊長谷朝倉宮
清寧	磐余甕栗穂宮	賢宗	＊近飛鳥宮
仁賢	石上広高宮	武烈	泊瀬列城宮
継体	磐余玉穂宮	安閑	勾金橋宮
宣化	桧隈盧入野宮	欽明	磯城嶋金刺宮
敏達	譯語田幸玉宮	用明	池辺雙槻宮
崇峻	＊倉椅柴垣宮	推古	小墾田宮
舒明	飛鳥岡本宮	皇極	飛鳥板蓋宮
孝徳	難波長柄豊碕宮	斉明	後飛鳥岡本宮
天智	近江大津宮	天武	飛鳥浄御原宮
持統	藤原宮		

＊は古事記、他は日本書紀による

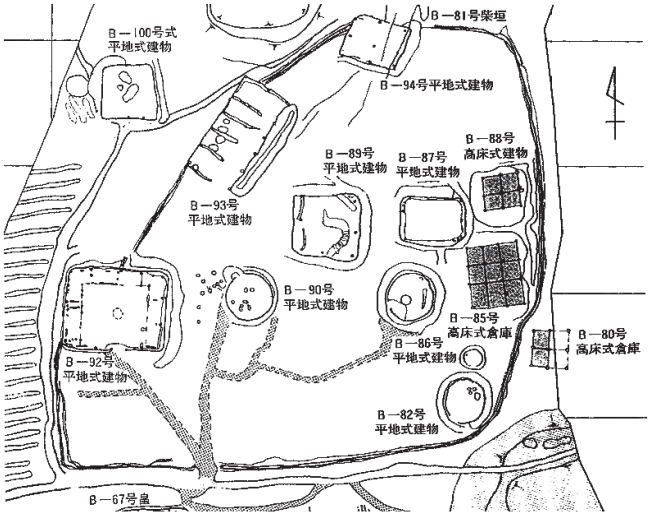


図 11 −①　群馬県黒井峯遺跡（石井克巳原図）

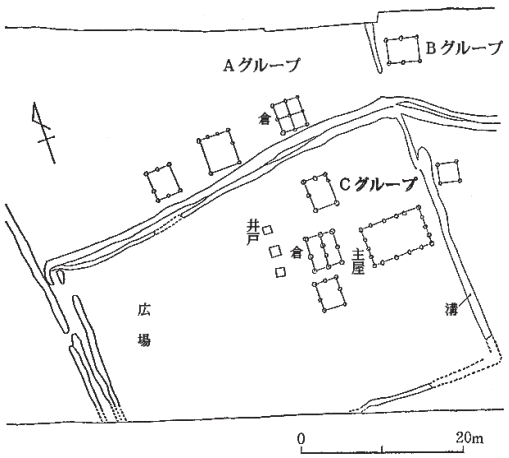


図 11 −②　大阪府大園遺跡

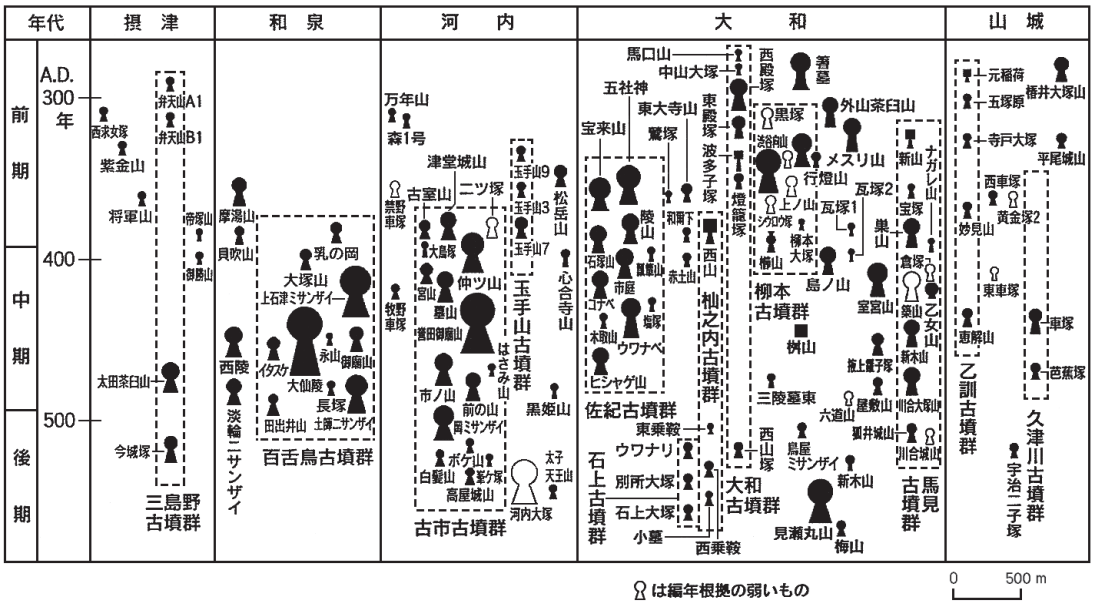


図 13　畿内における大型古墳の消長（白石太一郎原図）

者は、それぞれ狭い意味での血筋の継承者であったとすれば、首長権の移動というものは、王権交替を意味しますから、争乱が起こりがちだったことになります。そうでなく、平和裡に首長権が移動したのなら、話は別になります。この歴代遷都を見た場合に、だんだん飛鳥地方に集中していって、そしてやがて飛鳥地方に宮が集中的に営まれるようになっていくわけですから、都を変えると言っても、かなりの広がりのなかの諸集団間の合意が前提となる、ゆるやかな集団関係が前提となっていたのではないでしょうか。

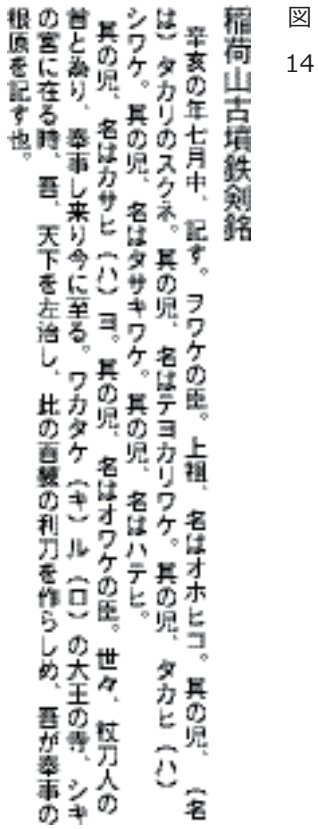
図 13 は、白石太一郎氏の図ですが、近畿地方と雖も、首長権は、常にある一定の地域集団によって担われていたのではない、と言いだされた方ですね。近畿地方では、200 メートル以上の規模の巨大古墳は、最初のころは三輪山の周辺部、桜井市のあたりにありました。それが奈良県北部佐紀の地に、そして大阪平野へと場所を変えていきます。大規模なお墓が築かれる土地がずれていくのがわかります。大王権というのは一出自集団に、確保されていたのではなくて、畿内の連合政権のなかを、移動していった、とする見方ともある意味で結びつくことになります。

古墳時代だけではなくて、次の時代になっても、東日本の一般民衆のレベルでは、自分の菜園や宅地を恒久的に占取しようということはなくて、絶えず移動していた。その移動を可能にしたのは、先ほど言いましたような、単系の出自集団ではなくて、横のつながりが多い集団関係こそが、こういう現象をもたらしたと考えられないでしょうか。

5．まとめ―５世紀後半の変革と新技術の導入

さて、非常にとりとめのないことを申しましたけれども、言おうとしてきたことは、４世紀から５世紀にかけてのころには、まだ、単系出自集団というようなものは形づくられていなかったのではないだろうか。したがって持続的に王権を継承した出自集団は、組織的に未成熟だったのではないだろうか、と考えてみたかったのです。

ただ、例えば、新しく武蔵国の北部に王権を開いたと思われる埼玉古墳群の稲荷山古墳出土の鉄剣銘を見ますと、図 14 にあるとおり、「辛亥の年七月中、記す」で始まる有名な銘文ですね。辛亥の年というのは 471 年のことですから、５世紀の終り。これを見ますと、「ヲワケの臣、上祖、名はオホヒコ。其の児、タカリのスクネ。其の児、名はテヨカリワケ。其の児、名はタカヒシワケ。其の児、名はタサキワケ。其の児、名はハテヒ。其の児、名はカサヒヨ。其の児、名はヲワケの臣。」と書いてあります。つまりこれを見ますと８代にわたって系譜が記されている点、しかも「其の児、其の児、其の児」でつながっているから、これは男系、単系の出自集団であったことは間違いない。８代というから、古墳時代初めにはすでにそうだった、と考えるのが通常でしょうが、反論があります。この「其の児、其の児」とは、その当時の人の書き方であって、要するに、その祖霊、首長霊と


稲荷山古墳鉄剣銘

辛亥の年七月中、記す。ヲワケの臣。上祖、名はオホヒコ。其の児、（名は）タカリのスクネ。其の児、名はテヨカリワケ。其の児、タカヒ（ハ）シワケ。其の児、名はタサキワケ。其の児、名はハテヒ。其の児、名はカサヒ（ハ）ヨ。其の児、名はオワケの臣。世々、杖刀人の首と為り、奉事し来り今に至る。ワカタケ（キ）ル（ロ）の大王の寺、シキの宮に在る時、吾、天下を左治し、此の百錬の利刀を作らしめ、吾が奉事の根原を記す也。

図14



図15　大阪府松岳山古墳と平尾山千塚

言ってもよいと思いますが、を受け継ぐ人が、「其の児」なのだ。したがって、地域的な広がりのなかで、なかの誰かが初代の王様になった、その次の２代目は○○ムラ、○○集団から出たとしてもそれは、「其の児」ということで、単に祖霊を受け継ぐ人、ということであって、血筋を表すものではないという人たちもいます。それからまた別の言い方をする人もいます。それは「タカリのスクネ」、「オホヒコ」などとあるように、「ヒコ」とか「スクネ」は全部尊称、ある立場の人たちに対する称号であるということです。最初の人びとには尊称が続いている。しかし最後の２人になると「ハテヒ」とか「カサヒヨ」、尊称なしとなります。だから、最後の２代だけは本物で、頭の部分は全部、付け足したものつまり架上である、ということですね。したがって、「カサヒヨ」と「ハテヒ」、「ヲワケの臣」、３代の系譜がここに記されているに過ぎない、と見る人もおります。全体としてやはり、これは単系の出自集団をそのまま表現しているものではないだろう、その証據に、ここには名字が出ていない。まだ姓がつくりだされる前の段階、やはり単系の出自集団形成以前の人びとが、それを志向してつくらせた、と考えるべきではないだろうか、という意見があります。つまり、６世紀に入るころに、いわゆる氏とか、単系出自集団を政治的に形づくっていこう、という気配が濃厚になった情況をうかがえるというのです。

そうすると、図 15、これなども白石さんの説明によりますと、４世紀に松岳山古墳という大きな古墳がつくられる。これが５世紀の半ばをすぎたころに、その裏山にひとつまたひとつと次々に小古墳がつくられはじめ、たちまちの間に、大古墳群、平尾山千塚が時期がちがう松岳山古墳の裏山につくられたようです。同じことは、奈良、大阪など、あちこちでみられます。これは白石さんによると、単系の同族意識が芽生えてくるなかで、群集墳は、祖と仰ぐ大きな古墳をとりこむようにして形成されたと考えられています。つまり、５世紀ころに、社会組織のうえでは、おそらく氏という単系同族団が政治的に意識されたことの反映と理解することができると考えます。

５世紀の後半と言いますと、いろいろなことがありますね。ここでちょっと補充しておくと、吉備地方の場合には５世紀の後半期をもって前方後円形の大型墳がみられなくなります。有力だった吉備も衰えたのでしょう。ここではその後 100 メートルに達する前方後円墳はずいぶん遅れて、こうもり塚が築かれるだけとなります。同じように、山梨県の場合も、やはり５世紀に前方後円

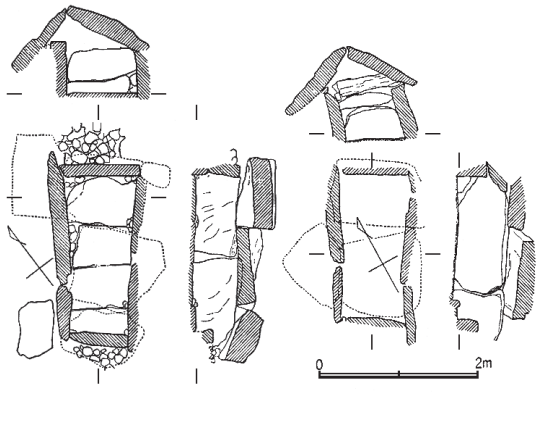
墳がなくなります。これに対して都出比呂志先生は、地域的な古墳の盛衰は、その地域を個別に見ては誤まりをおかす。各地域の古墳に大きな変動があるときには畿内中枢部の古墳にも変動がある。つまり、中枢部の政治組織に変動があったときにそれが各地に波及した結果という、列島規模の変動だというのです。確かに、そういうこともあるでしょう。ただ、ここでは、５世紀の半ばすぎという時期には、広域にわたるいろいろな意味での変動が多かったと考えるだけにとどめておきます。

そして、最後に今回の展覧会のテーマでもあります技術という点に若干ふれておきたいと思います。この５世紀という時期には、いろいろな技術集団が大陸からやって来たことがうかがえます。最近になって注目をあつめているもののひとつが積石塚です。墳丘に土を積むかわりに石を積んだ積石塚は、東北アジアに行けば広く見られるものです。これに注目する人びとの最近の発表でだんだん分かってきたことがあります。例えば、図 16—①に「大室 356 号墳・357 号墳」と書いてありますけれど、これは、積石塚の埋葬施設として、板石を組み合わせて作った箱形石棺です。そしてそれに乗せる天井石は殊更に長い石を使って傾斜をもたせるのです。いわゆる屋根形の天井になります。これを合掌式石棺などど呼んだり、合掌式石室と呼んだりします。要するに、切妻の屋根形だったのです。これがある大室古墳群は、500 基ちかくの積石塚がいくつもの谷に分かれて集中してつくられています。しかも、谷底の部分に一番多くつくられています。つくり方もまた独特です。この古墳群のひとつからたくさんの土器が出土しました。調査をされている大塚初重先生は、５世紀後半の土器だとおっしゃっておられます。そうすると５世紀の後半期のころには、ここに積石塚をつくる人が増えていた、と考えられます。

ところが、長野市の周辺でも、やはり、装具をつけた馬のお墓が見つかっているといいます。しかもその馬具は大変古い轡を着用していると言います。同じ長野市内でも地附山というところでは、盛土だけど合掌式石棺をもつお墓が見つかりました。やはり朝鮮半島系統の、古い馬具が見つかっています。５世紀代の前半に遡りうるものです。そしてつぎに長野県の天竜川沿いの飯田市のあたりでも、申し合わせたように、たくさんの馬具が見つかってまいりまして、そのなかに馬具を副葬したもの、あるいは馬そのものを埋葬したもの、そういったものが次々に見つかっております。これは普通の盛土墳です。明らかに、馬の飼育に関係する人びとの登場だと思います。

さらにこの２、３年、群馬県でも高崎市で発掘調査が進んでまいりまして、長瀞西古墳という昔から知られている古墳がありますけれども、付近からいくつもの積石塚が見つかりました。ところがそこの積石塚というのは、四角なんです。長野県の例は丸でした。ここでは四角い区画をもった小さな積石塚がいくつも見つかっているのです。そしてやはり、非常に古手の馬具が出土しています。明らかに馬とかかわりが深い人びとの墓だと理解できます。

そして、最近は積石塚に関するシンポジウムが開かれ



大室 356 号墳　　大室 357 号墳

図 16 −①　長野県大室古墳群

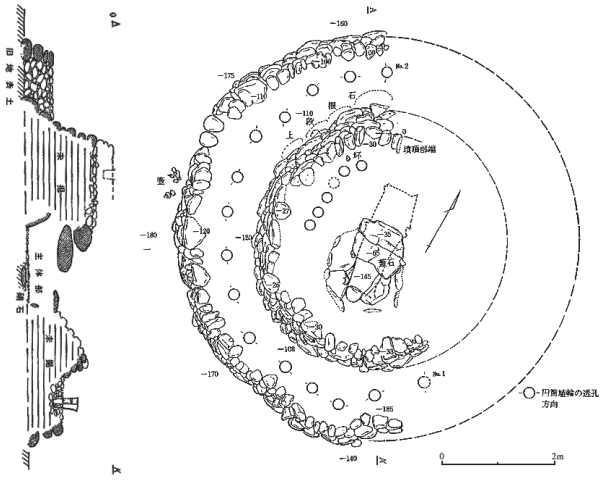


図 16 −②　群馬県鏡石古墳

たりして関心が高まっているのですけれども、群馬県の場合、特色のある例をひとつだけあげておきたいと思います。図 16—②、鏡石古墳では、組み合わせ式の石棺を埋葬施設に使っております。そしてそれを埋めこむようにして、二段に積んだ石積みがあるところから、これを積石塚だと報告されております。そしてこれには、埴輪も使ってあるし、土器も出土しています。土器自体はそんな古いものではありません。ところが、この近くから、四角い平面形をした積石塚、あるいは丸く囲む、あるいは屋根形のもの、そういったいろいろなものが発見されました。同じ積石塚でも系譜のちがいと考えていいだろうと思います。馬具を見るかぎり、これは明らかに朝鮮の、いわゆる伽耶系統のものである、ということが分かります。５世紀の後半というころ、半ばすぎぐらいに、朝鮮半島からかなりの人が移住して、各地で馬の飼育に乗り出したと見てよいのでしょうか。

中国の南朝との交流があったのもこの時期ですね。そして南朝との交流のなかで、倭の五王たちは、中国型の支配形態を、より深く知ることにもなったことでしょう。ピラミッド形の社会構造に近づいていったことでしょう。そういうものと絡み合って、おそらく５世紀の後半ころ、行政組織にも大陸の影響が強まったのではないでしょうか。そしてそれは、単に倭人社会の政治上の問題ではなくて、大陸からの渡来人による変化も大きかったにちがいありません。

かなりの人たちが大陸から日本にやって来ているのですけれども、それについて、人類学者の尾本恵一さんは、今から 2300 年まえ、つまり弥生時代に入るころから、古墳時代の終りである７世紀までのおよそ 1000 年の間に、この列島に渡来した人は 300 万人に上るだろう、との推計を支持されています。ちなみに奈良時代の人口を 540 万人と推計してのことです。

そして、これは私には分かりませんので、また教えていただかなくちゃいけないことは、この三河、豊田市を含む名古屋台地のあたりに、大古墳がつくられるようになるのが５世紀の後半期。それが全体の動きのなかに、どういう位置づけがされていくのかということは、問題として残されていると思います。

先ほど申しましたように、５世紀後半には馬を中心にしていろいろなものが入ってきたにちがいないと言いましたけれども、この地方を考える場合にそれをとりこむ必要の有無についても、お考えをおききしたいのです。最初、専門家でない方がたを対象に話を、ということで承ったのですけれども、顔触れを拝見しているうちに恐ろしくなり、急遽内容を改めようとしたために、かえってちぐはぐになってしまいました。変な話で終ってしまいましたけれども、一応これで終りにしたいと思います。（拍手）

平成 11 年８月 21 日（土）豊田市民文化会館にて収録